

令和 2 年 5 月 12 日現在

機関番号：34602

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K02463

研究課題名(和文)太平洋戦争下の朝鮮人詩人たちの詩と日本

研究課題名(英文) On the relationship between poetry written by Korean poet and Japan during the Pacific War

研究代表者

熊木 勉 (Kumaki, Tsutomu)

天理大学・国際学部・教授

研究者番号：70330892

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、太平洋戦争下という時代背景を念頭に置き、その時期の朝鮮人文学者たちの姿勢、日本との関連性、日本語文学などについて検討を行った。この時期の朝鮮文学についてはそれなりの研究の蓄積がなされてきたが、この時期の創作が作家・詩人たちにどのように意識され続けたか、あるいはそれに伴う内傷を文学者たちがどのように克服しなければならなかったのかという解放後との「連続性」についてはこれまで多くは論じられていない。本研究ではその理解のために資料の収集、また著名な文学者ではなくとも参考とする詩人たちの作品検討等を行った。とりわけ若手を中心として資料の整理、検討を行い、一部学会誌等に公表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

太平洋戦争下の朝鮮の文学についての検討には資料的な限界があり、資料の発掘や整理が不十分であったり、作品そのものの検討が本格的になされることなく、単に日本語で書かれたというだけで批判の対象になったこともあった。しかし、重要なのは、作品そのものの内容であり、それを文学者たちの人生においてどのように位置づけることができるかをより具体的かつ客観的な視角から再検討することである。本研究で意識したのは、厳しい時代状況下においても文学作品を発表しようと努力し続けた文学者たちの姿の確認であり、研究を通じて何人かの詩人についてはその糸口を提供できたものと思われる。

研究成果の概要(英文)：In this study, I researched the attitudes of Korean writers and poets during the Pacific War from the aspect of literary relevance to Japan and works which written by Japanese language. Although a considerable amount of research has been accumulated about Korean literature in this period, much has not been discussed aspect from continuity after the liberation from Imperial Japan, for instance, with how the literature in this period was continuously recognized by writers and poets and how they had to overcome them. For the purpose of this study, I collected and researched works of some important poets, even if they were not famous writers or poets. Especially I organized and researched works written by young writers and poets, and published articles about some of them in academic journals.

研究分野：朝鮮近現代文学

キーワード：韓国近代詩 朝鮮近代詩 朝鮮の日本語詩 慰安婦と文学

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究の背景は、申請者が1940年代前半期の朝鮮人詩人について関心を持って研究を続けており、とくに尹東柱、金朝奎について一定数の論文を発表してきたことにある。植民地期の朝鮮人詩人たちの中には厳しい時代的条件のもと、必ずしも光があてられてこなかったり、対日協力という側面を有するがために検討が忌避される詩人たちもいた。本研究の目標として、こうした詩人たちを客観的かつ公正にとらえ直すこと、そしてそれぞれの詩人の個性と戦争・日本体験がどのように関係し、結びつきうるか、さらにはそれが朝鮮の解放後の文学者たちの生き方にどう結びついていくかを再検討することにあった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、朝鮮人文学者たちに最も過酷であった太平洋戦争期において彼らが意識した内地、戦争、文壇との関係までを念頭に置きつつ、当時の彼らの詩を再検討すること、さらに関連資料発掘を通じてこの分野の研究の進展を図ることにある。検討対象は日本語作品、朝鮮語作品の両方である。朝鮮人文学者と内地・日本との関係考察は主として小説分野での研究の蓄積が多く、また日本語作品のみに視点が集中しがちであったが、本研究では朝鮮語作品あるいは、文学者たちの戦争前、戦争後の創作のあり方までを含めて、より広い視角から当時の詩の理解を図り、この時代の朝鮮人詩人たちの姿を捉えなおすこととした。

3. 研究の方法

当初より、本研究で意識したのは、

(1) 太平洋戦争下の朝鮮における抒情詩の研究

(2) 太平洋戦争下の朝鮮におけるいわゆる「親日詩」の研究

以上の側面であった。「抒情」と「親日」の問題を切り離すことはできないが、大まかな傾向としてこうした枠組みを設定することは1940年代の朝鮮の詩を理解するにあたり有効であると思われる。また、これらを具体的に理解することにより詩人たちの太平洋戦争下の詩が戦争前、戦争後の詩にどう結びつくかも含め、当時を生きた詩人たちの姿に迫る手がかりを見つけうるものと考えられる。研究にあたっては、まずは資料の発掘と整理が望まれた。また、従来一定程度の言及がなされてきたいわゆる大家たちの作品については、作品数もしくは詩人論の膨大な先行研究(1940年代に限らない場合、相当数の研究がある)により、扱うにはそれなりの時間が必要であるため、まずは現時点でできるだけきちんと整理しておく必要のある、1940年代前半期に活躍した若手詩人たちの文学を優先的に扱い検討を試みた。

4. 研究成果

本研究の研究成果として主として以下のことがあげられる。

1. まず、最初に取り組んだのは、すでに申請者が他の科研費(基盤研究(B)25284072「朝鮮近代文学における日本語創作に関する総合的研究」:研究代表者・波田野節子)分担者として発掘していた鄭芝溶の日本語詩の整理であった。鄭芝溶は1920年代に同志社大学に学んだ折、少なくとも日本語詩を残している。これらの作品をあらためて整理し、日本滞在時の彼がどのような心境で学生生活を送ったかを確認することで、のちの太平洋戦争下における文学にまでつながりうる心的葛藤や日本への違和感といったものを考える手がかりとしようとした。直接的に太平洋戦争下の詩を扱ったわけではなかったが、その時期の詩作や詩的変遷の前提条件を確認する作業であったと言える。

2. 慰安婦に関係する文学を調査した。これは、詩にとどまらず小説までも含めて、太平洋戦争下の文学を確認することで、日韓の間でわだかまりが発生している慰安婦問題にこれまでとは違った視角を提供する論文となったものとする。文学もときとして歴史の真実を伝えるのであり、むしろ人間の内面までも含めて参照することができるという点から、歴史資料とは異なる側面からのアプローチとなりうるものであったと考える。本来予定していた、叙情あるいは親日という問題とはまた別の、当時の時代の中で身売りせざるを得なかった女性たちの姿を文学から見出し、人々はそれをどう見ていたのかを検討した。この部分は慰安婦問題の日韓合意という政治的な出来事をきっかけに本研究にも取り入れたものである。

3. 詩人・趙郷の太平洋戦争下の詩について論じた。趙郷は朝鮮・韓国を代表するシュールレアリズム詩人である。しかし、その根底にある「暗さ」は何であるか。日本で、日本語により少なからぬ詩を残した趙郷は、おそらくは自らの詩作、とりわけ対日協力といわざるをえない詩作について、自責の念を持ち続けたものと思われる。その内面の傷、どうしようもない鬱屈が、彼のモダニズムの根底に横たわっていると見ることができる。その根拠として考えられる詩について論文で論ずるとともに、彼の全集(ヨルムサ:1994年)に掲載された日本語詩が、実は若干改作された形で収録されていることを指摘し、今後の検討において、こうした部分に注意する必

要があることについて触れた。ただし、実際のところ、全集の編者による編集とは異なり、詩人自身はこうした改作の意図は全くなく、むしろ自ら書いたものを比較的正確に資料として残そうとしていたことが推測される。

4. 吳章煥の文学について、とりわけ彼が残した1930年代の日本語詩を手がかりに検討を試みた。解放後の吳章煥の詩や論説の激しい言葉の背後にあるものは何か。それを考えるにあたって重要であるのは、1940年代前半期の詩人たちの態度の問題であったものと考えられる。吳章煥はぎりぎりまで朝鮮語詩にこだわり、1943年まで朝鮮語の詩作を試みた。通常の抒情詩の発表が必ずしも自由ではなかった時代であっただけに貴重な作業であったが、一方で彼は1930年代に日本で日本語詩を発表するほどに日本語力が高かった。つまり、当局の要請があればいくらでも言葉としては日本語詩を書くことができたはずであったが、彼はそれを受け入れなかったということになる。彼なりに朝鮮語にこだわった経緯が、解放後の激しい同僚たちへの批判につながったとすると、彼が残した1930年代の日本での日本語詩発表の詩の内容はいかなるものであったかの確認は必須である。そこには、デカダンス・モダニズム的な要素もある一方で、ヒューマニズムに根差した視角も同時にうかがうことができた。

5. 1940年代末から1950年代のモダニズムの中心として存在した詩人・金暎麟の植民地期の文学について考察した。これまで金暎麟が注目されたのはほぼ1940年代末から1950年前半期のいわゆる「後半紀」同人としての活動であった。しかし、1930年代モダニズムと1950年代モダニズムの連続性ということを考えるときに、金暎麟は重要な存在として考えうるものと思われる。彼は1940年代前半期においても少壮詩人を代表する一人でもあった。しかし、これまで彼の植民地期の詩について論じた研究はごく限られたものであった。あるいは、もしも論じたとしても対日協力の痕跡を指摘するにとどまる場合が多かった。本来であれば、日本の先端的な文芸誌であった『VOU』の正式メンバーとして北園克衛とも親交が深かった彼について、さらなる研究が必要なのは当然であるが、対日協力の陰に本来の姿が覆われてしまった感がある。しかし、彼が書いた評論を読むと、彼が決して時局に迎合した詩を書くことを了としていなかったことが確認でき、詩作品そのものからも、実は彼ができてくる範囲で詩の「技術」に中心をおき最後にはそれすらも放棄せざるをえなかった経緯を見ることができた。

6. その他の詩人として、本研究の期間を通じて一定の作業の進展を見ることができた詩人たちに金鍾漢、楊明文、金圻洙がいる。金鍾漢については、これまで知られていない作品を複数見つけることができたが、それらの作品を彼の文学の中でどう位置付けることができるかについては十分に検討がいたらず、研究期間が終了した後も引き続き研究を深め、論文としてまとめる予定である。楊明文については、植民地期に発表した作品についてはおおむね収集できたものと考えられる。学会の口頭発表でその一覧を提示した。彼についても、さらに検討をしたうえで論文としてまとめる予定であるが、解放後の詩作がかなりの分量に上り、検討には一定の時間が必要である。金圻洙に関してはこれまで論じた研究者はいない。しかし彼についても学会の場で作品一覧と作品傾向の整理を行い、分かる範囲で彼に関する情報を提供した。しかし、あまりに残された情報が少なく、彼の具体的な検討は極めて難しい。かろうじて、官能的な要素を詩に描いた特異な傾向を指摘できそうではあるが、解放後には詩作を断念した模様で、彼の文学の検討は今後の課題とせざるを得ない。こうした詩人たちの作品については、個人情報あまりに不明瞭な金圻洙を除き、研究期間終了後、さらに検討を重ねて論文としてまとめる準備段階にあるものと考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 熊木勉	4. 巻 第12号
2. 論文標題 呉章煥の抑圧された自我－日本語詩を整理しつつ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 地球的世界文学	6. 最初と最後の頁 406～427
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 熊木勉	4. 巻 A：人文科学編：Vol.18.No.2
2. 論文標題 尹東柱の詩とその根底にあるもの	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 福岡大学研究部論集	6. 最初と最後の頁 133～145
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 熊木勉	4. 巻 単行本
2. 論文標題 韓国文学から見た慰安婦像、その記憶の形成	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『対話のために 「帝国の慰安婦」という問いをひらく』（浅野豊美、小倉紀蔵、西成彦編）	6. 最初と最後の頁 113-147
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 熊木勉	4. 巻 第16号
2. 論文標題 金璟麟と朴寅煥のいくつかの詩について（韓国語）	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 近代書誌（韓国語）	6. 最初と最後の頁 166-184
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 熊木 勉	4. 巻 29巻3号 (通巻130号)
2. 論文標題 『引揚げ文学論序説』へのコメント	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 立命館言語文化研究	6. 最初と最後の頁 21-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 熊木 勉	4. 巻 第9巻
2. 論文標題 呉章煥の日本語詩 (韓国語)	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 地球的世界文学 (韓国語)	6. 最初と最後の頁 500-533
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 熊木 勉	4. 巻 Vol.15 No.2
2. 論文標題 『同志社大學豫科學生會誌』『自由詩人』のころの鄭芝溶	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 『福岡大学研究部論集』A:人文科学編	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 熊木 勉	4. 巻 第47巻第4号
2. 論文標題 趙郷の日本語詩とその傷跡	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 福岡大学人文論叢	6. 最初と最後の頁 1451-1479
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 熊木勉
2. 発表標題 呉章煥と「戦争」
3. 学会等名 人文評論研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 熊木勉
2. 発表標題 1940年代前半期における朝鮮の新進詩人たちの日本語詩について—金圻洙、楊明文、金環麟を中心に—
3. 学会等名 第5回中日韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 熊木勉
2. 発表標題 韓国文学から見た慰安婦像
3. 学会等名 比較植民地文学研究会および東アジア和解と平和の声（共同開催）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 熊木勉
2. 発表標題 尹東柱の詩とその根底にあるもの
3. 学会等名 福岡に尹東柱の詩碑を建てる会主催
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 熊木勉
2. 発表標題 植民地期の朝鮮人と日本語
3. 学会等名 仁川大学校師範大学日本語教育科（招待講演）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 熊木勉
2. 発表標題 金璟麟のモダニズム－植民地期の詩と詩論を中心に－
3. 学会等名 第70回朝鮮学会大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 李泰俊著、熊木勉訳	4. 発行年 2016年
2. 出版社 平凡社	5. 総ページ数 435
3. 書名 思想の月夜：ほか五篇	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----